

物的対象の自己統一性と質料形相論

Self-unification of Physical Objects and Hylemorphism

加 地 大 介*

KACHI, Daisuke

本稿では、ジョナサン・ロウとロバート・クーンズによる実体の定義を参照しながら、物的対象の自己統一性について質料形相論的観点から検討する^①。

物的対象の自己統一性について考察するにあたり、実体的対象が個体の一種であるということの最も一般的な意味とそこでの物的対象の位置づけを改めて確認しておこう。その一般的意味とは、アリストテレスがその四カテゴリー存在論のなかで「何らかの対象について述べられるものでもないし、その中にあるものでもない」という形で特徴づけた、垂直的述定の中での基底性である。言い換えれば、実体的対象とは、何らかの対象を例化することはあっても、それ自体が例化されることはないという意味での、例化の究極的な担い手だということである。

そしてこのような基底の例化を行う対象という意味での個体としては、物的対象以外にも集合や命題などの抽象的個体が少なくとも可能性として考えられる。したがって、実体的対象を何らかの意味で「物的」たらしめる要因としての「質料性」のひとつの最低要件は、それが抽象的ではなく具体的な対象であること、すなわち、当該の個体による基底の例化が時間と空間の中で行われるということである。さらに、こうした具体性・時空性

を伴う個体としては、(トークンとしての)プロセスやできごとなども考えられるが、それらの個体と対比される実体性を含んだ意味での「物的」対象の特徴として「質料性」を捉える以上、物的対象の具体性・時空性は、継続と対比される意味での持続としての「耐続性」によって実現されるものであると考えるべきであろう。

次に留意すべきは、ここでの「統一性」とは、存在論的な意味での基礎的な全体性・単一性として想定されるものだということである。そして、質料形相論との関わりで言えば、物的対象のそのような意味での統一性には、質料的な全体性と形相的な全体性の双方が関与しているであろうと予測される。一方、物的対象の自己統一性における「自己性」は、伝統的には、ある種の独立性として規定されてきた。本稿では、その自己性を「独立性」と「実在性」というふたつの要因に分けて考えたい。ただし後者も、我々の精神からの独立性としての実在性という意味では、独立性の一種と見なすことができる。

1.

ロウは、質料形相論における質料と形相の「結合」という概念が不明確であることを批判し、質料的側面を排してもつばら形相論的に実体を捉えるべきであると一貫して主張している^②。しかし、実体の定義に関しては、論文「複雑な実在：実体

* かし・だいすけ
埼玉大学 大学院人文社会科学部研究科教授、哲学

存在論における統一性・単純性・複雑性」(2013)において、1998年に著書『形而上学の可能性』において行った定義に対して若干の変更を行った⁽⁴⁾。

まず、彼は1998年の論考では存在の(個別的)依存性を同一性の依存性によって定義していたが、2013年論文では、存在論的依存性のなかでも、同一性の依存は非対称的(あるいは少なくとも反対称的)でなければならないのに対し存在の依存は対称的であり得るという理由で、同一性の依存性を存在の依存性から分離した。これによって、実体の存在論的独立性が、存在するか否かに先行して規定される、まさしく「何であるか」という意味での同一性に関する独立性として、より鮮明化されたと言える。

そして、「具体的対象(concrete object)」を、(a)時間と空間の中に存在し、かつ、(b)因果的力能を有する(ひとつの)(c)性質の担い手(property bearer)という意味で理解したうえで((a)(b)が「具体的」に、(c)が「対象」に対応する)、実体を次のように定義した：

[DL] x は個別の実体(individual substance)である
=df x は、他の具体的対象に同一性依存(identity dependent)していないような具体的対象である

個別の実体が時間と空間の中に存在するという意味で具体的であるという点は、1998年時点においても主張されていたことなので、因果的力能を有するという点が定義に新たに加わったことになる。いずれにせよ、ロウの定義は、実体の実在的定義によって示される本質に関する独立性のみに言及してなされているという点で、もっぱら形相論的に行われているところのその特徴がある。

一方、クーンズは、その論文「強固な vs. 脆弱な質料形相論：構造のアリストテレス的説明に向けて」(2014)において、特に複合的構造を持つ実体

に対して、次のような定義を提示した：

複合的実体(composite substances)は、機能的諸部分の階層的な構造を実現する。二次的力能は、束構造(lattice structure)の頂点(有機体全体)から底辺(素粒子たち)へと段階的に下降していく。同様に、それによって有機体全体の存在が(その偶有的性質とともに)維持されるところの物的プロセスは、その同じ機能的諸段階の底辺から頂点へと上昇していく。中間的諸段階は、同名意義原理(Homonymy principle)が適用される依存的諸部分から成っており、一方、その最下レベルは、実体的変化(substantial change)の耐続的な基体であるところの独立的諸部分から成っている。実体は、このような構造の頂点に存在しうる何ものかとして、次のように定義することができる：

〔複合的〕実体の定義：x が実体であるのは次の場合である：x は包括されていない(unencompassed) (すなわち、いかなるものに対してもその真部分ではない)⁽⁴⁾。

上記のクーンズによる説明の中に登場する「二次的力能」とは、複合的実体の諸部分が、その固有の力能(一次的力能 primary power)に加えて、〈実体の構成部分となることによってその全体が所有する一次的力能からの影響をも部分的に受けることによって所有することとなる力能〉を表している。また、「同名意義原理」とは、〈生物の器官や四肢などの諸部分は、生物から切り離されたときにはもはや存在せず、ただそれらは同じ名前と呼ばれるにすぎない〉というアリストテレスが提示した原理を表している。つまりここでは、複合的実体の構造における中間的な諸部分は、実体全体との関連によってのみ存在しうる依存的諸部分であるということが主張されている。

クーンズの定義は、ロウとは対照的に、実体の〈部分全体〉関係にのみ関わっているという点において、もっぱら質料論的な定義であると見なす

ことができる。また、クーンズは、建築物や機械などの人工物は実体には含めないということ、したがって実質的に生物（および人物）のみを複合的実体として認める点において、ロウよりもアリストテレスにより忠実である。

2.

このように、ロウとクーンズがそれぞれ提示している実体の定義そのものに関してはほとんど共通性が見出せないが、各々の背後にある実体論には意外に共通性も多い。そのことを、相違点にも目を配りつつ確認しておこう。

まず第一に、当たり前と言えども当たり前だが、二人とも基本的にはアリストテレス的実体論に即した形でいわゆる正統的な実体主義者だということである。ロウは質料形相論の特に質料論的側面に対して批判的であるので、たしかに「強硬な」質料形相論者ではない。しかし、すぐ後で述べるように、彼自身「私はあるバージョンによる質料と形相の区別は支持する」と述べている⁶⁹。一方、クーンズは、質料形相論に関してはよりアリストテレスに即しているが、形相をプロセスとしての個体と見なし、本質を実体の性質の一種として位置づけている点においては、アリストテレス的な四カテゴリー存在論の図式を必ずしも踏襲していない。しかし、少なくとも個体的形相を承認している点では、ロウの「個体化した形相としての実体」という主張と通い合っている。

そして二人とも、構成部分間で一定の関係が成立すれば一様に実体と見なしってしまうバーナード・ウィリアムズ、キット・ファイン、マーク・ジョンストンや、形相と質料を実体の「部分」と見なすカトリン・コスリツキのような、クーンズが言うところの「脆弱な」（形相質料論者としての）実体主義者ではないという点で共通している⁶⁹。また彼らは、チャールズ・マーティン、ジョン・ヘ

イル、イングバール・ヨハンソンのように、実体が属性とは峻別されるべきカテゴリーであることは強調しながらも両者がいわば相互依存的な関係にあると見なす立場、すなわち、何らかのものの二つのアスペクトとして実体と属性を位置づける、ダブル・アスペクト説的な実体主義とも一線を画し、実体を最も基礎的な存在者として位置づけている⁷⁰。もちろん、実体を実質的にトロープの束に還元してしまうピーター・サイモンズのような還元主義的実体論にも与していない⁶⁸。これらの点において、ロウとクーンズはともに「強硬な」実体主義者だと言える。

第二に、二人とも、複合的実体の構造を純粋な原子論にも全体論にも陥らない形で捉えようとしている。クーンズについては、上で引用した彼の定義に対する説明によってそのことは明らかであるが、ロウも次のように述べている：

複合的実体の多元論者 (complex substance pluralist) として、私は実際、「上方」「下方」両方の存在論的依存性と独立性がありうるということ、したがって、「レベル」間の依存の唯一の方向は存在しないということ、を、主張する⁶⁹。

異なるレベルに存在する対象間における依存性や根拠づけの唯一の方向を伴うような、単一の普遍的な存在論的レベルの序列を認める必要はない。そしてその意味において、「最下」「最上」「中間的」のいずれを問わず、唯一の存在の「基礎的レベル」を承認する必要はないのである⁷⁰。

そして実際、内臓や四肢などの生物の中間的レベルの部分に対してはアリストテレスの同名意義原理を適用すべきであるが、最下レベルの部分は生物そのものの発生前から発生後を通じて耐続する実体として承認すべきであると考える点におい

て、ロウはクーンズと一致している⁽¹¹⁾。両者の相違は、クーンズが「最下レベルの部分」として素粒子のような基礎的粒子のみを想定しているのに対し、ロウは生物を構成する原子、分子、細胞までもそこに含めているという、程度の差にすぎない。

そして何よりも重要な両者の共通性は、力能実在論に基づいた因果の力能理論をその実体論の中核に据えている点である。そのことは、本稿で見た二人による実体定義のいずれの説明においても力能への言及が含まれていることによっても明らかであるが、より具体的な類似性は、それぞれの次のような叙述に見られる：

(ロウ)

電子が陽子に捕えられてその周囲の位置を占めるように「再配置」されたときは、水素原子というまったく異なる種類の新たな具体的対象が実際に存在し始めることとなる。この対象は、陽子や電子の特徴とはまったく異なるある特徴、とりわけ、ある力能を有しており、またその特徴は、自由陽子と自由電子のメレオロジー的和の特徴とも異なっている。新たに作られた水素原子において、陽子はそれまでとまったく同じ単なる陽子のままであり、電子も単なる電子のままである。そこでは、新たな形相——陽子も電子も有していないような形相——すなわち水素原子の形相が例化されている⁽¹²⁾。(下線で示した強調はロウ自身によるもの。以下でも同様。)

(クーンズ)

レアは、次のように問いを発する：「塩化ナトリウム分子において、〈その質料の潜在性(potentiality)を塩化ナトリウム分子として現実化する〉ものは何なのか？」塩化ナトリウム分子が真正な実体であると想定するならば(少なくとも NaCl 分子が生物の中に組み込まれていない限り、私はそのことを承認する)、答えは次のとおりである：「(特有の量子的関数によって表現される) 特定の創発的な化学的形相が、質量エネルギーと

電荷の特定のパケットの潜在性を NaCl 分子として現実化したのだ⁽¹³⁾。」

そもそもロウが質料という概念に批判的であるのは、まず第一に、〈「形相」と「質料」といういずれも単独では不完全な存在者が「結合」して完全な実体を組成する〉という主張において用いられる「不完全」「結合」「組成」という概念が理解困難であるという理由からであった⁽¹⁴⁾。そして第二に、仮に「質料」を「物的対象を直接的に構成している素材」という意味で解するならば、往々にして物的対象はそのようなものを持たないということもそのひとつの根拠である。たとえば、船を直接的に構成するものは、素材というよりは板や柱やロープなどの多種の物体というべきであるし、クォークや電子などの素粒子は、いかなる「素材」によってもできていないので、「物理的(physical)」であるかもしれないが「非質料的(immaterial)」だと彼は主張する⁽¹⁵⁾。これらの結果、先ほど言及した、彼が支持するところの「あるバージョンによる質料と形相の区別」とは次のような内容となる：

…実体的普遍(substantial universal)の個体例は、個体としての像や個体としての虎などのような、個別的な具体的対象そのものである。したがって私が推奨する立場は次のようなものである：「もしも質料と形相の区別を有意味なものとしたいならば——この場合の「質料」は、近接質料(proximate matter)として理解されるものだが——個別的な具体的対象をそれ自身の個体的な「実体形相(substantial form)」と同一視する(identify)べきである⁽¹⁶⁾。」

一方、クーンズは、「強硬な質料形相論者」として、デイヴィッド・オダーバークやアナ・マルモドロと同様、現実性と潜在性の区別に基づいた質料

形相論を支持している⁽¹⁷⁾。しかし、その際の質料や形相をいかなる意味においても実体の「部分」と見なしてはいけなく、と主張する点においてはロウ（およびマルモドロ）と一致している。さらに重要なのは、彼はその質料形相論を次のように彼自身の力能因果論に即した形で定式化しているということである：

形相的因果と質料的因果は、私の見解では、ともに実在的で通時的な因果的結合である：その質料的参与者を伴いつつ各時間隔(interval)中に作用している形相のプロセスは、その時間隔の最終点における実体全体の存在の原因である。複合的実体が時点 t において存在するのは、 t の直前のある時間隔において、その質料的構成要素が適切な形相のプロセスに参加したからである⁽¹⁸⁾。

そしてクーンズとロウは、力能をその発現によって個別化するという点において一致しており、ここで述べられている「形相のプロセス」がまさにその発現に相当する⁽¹⁹⁾。だとすれば、質料を個別化した形相そのものとして解釈するロウの見解とクーンズの見解との懸隔は一見して思われるほど大きくはないと言える。というのも、力能が発現によって個別化されるということは、力能とその発現としてのプロセスとの間には何らかの内的関係が成立しているということを含意するからである。また、ロウ自身も、実体の本質はその通時的なあり方を含めて捉えられるべきであることを再三強調している⁽²⁰⁾。

形相に関してクーンズとロウの主たる相違は、先にも述べたようにクーンズが形相をもっぱら（プロセスとしての）個体として解釈するのに対し、彼がマルモドロに帰している「形相をプロセスそのものとして解釈するのではなく、そのような形相のプロセスによって具現化される抽象的対

象として解釈する」という見解を、ロウも四カテゴリー存在論に基づいて採用しているということである⁽²¹⁾。そして私自身も、この点に関してロウとマルモドロの側に与する者である。もちろんその主たる理由は、私自身も基本的にはアリストテレスの四カテゴリー図式に則った形で実体を捉えるということ、その結果として、ロウの主張するとおり、実体的普遍者としての実体形相とその個体化としての個体的形相という、いわゆる伝統的な第二・第一実体に対応する形相を承認するからである。

しかしそのことを別にして、仮にクーンズのように個体的な形相のみを承認するとしても、先ほど示したような、存在論的に基礎的な全体性を表す実在的定義としての本質に対応する何ものかとして形相を捉えた場合、実体が参与するプロセスにおける時間的・通時的な全体性（この全体性は、クーンズも強調するところである⁽²²⁾）だけでは不十分だと思われる。というのも、たとえば NaCl や H_2O という実体における分子構造や生物の身体構造などの空間的・共時的全体性も、実体の本質の一部として当然、実体形相に含まれるべきだからである。そして実際、クーンズ自身も次のように述べる際には、事実上そのことを暗黙の前提としていると考えざるを得ない：

共時的依存関係（単一時点において起きている）と通時的依存関係（先行する諸時点に存在する物または物たちに対する、ある時点におけるある物の依存関係）という、二種類の依存関係が存在する。共時的依存性はトップダウンであり、諸部分の力能が全体の力能に根拠づけられている。一方、通時的依存性はボトムアップであり、後の時点での全体の存在が、先行する諸時点での諸部分の活動に依存している。それゆえ循環はない。循環ではなく、依存の図式は、各時点において下降し時間の進行に伴って上昇するジグザグ経路と

なる⁽²³⁾。

すなわちここで彼は、実体においては、先ほど引用したような通時的依存関係以外にも共時的依存関係が存在し、後者においては、諸部分の力能を根拠づける共時的な全体性が、因果性や依存性の循環を避けるためには不可欠なものだと考えているのである。

3.

ロウとクーンズの異同に関する以上の分析を踏まえて、物的対象に関する質料形相論的側面について、私自身は次のように立場を定めたい。物的対象の形相的側面としては、四カテゴリー図式に即した形でロウやマルモドロが主張するような普遍者としての形相とその個体化された形相をそれぞれいわゆる第二・第一実体形相として認定する。これが、定義的本質によって示される *what it is* としての基礎的な全体性を表すものである。しかし一方では、クーンズが強調するように、このような形相の個体化が物的対象の力能によって実現されるということをその質料的側面として認定する。すなわち、ロウと同様、素材や裸の個体としての質料という概念は否定しつつも、力能的統一性を伴う空間的延長——いわば「力能的外延 (powerful extension)」——として物的対象の質料を措定する。その外延を明示するのが物的対象やその諸部分の境界であり、境界を通して当該の実体を取り巻く環境との諸関係や複合的実体の内部構造などが成立することになる。そしてこうした境界づけは、ミクロレベルからマクロレベルまでその粒度に応じた種々のレベルで成立している。当該の物的対象に関わるこのような力能的境界の粒度こそが、質料的な基礎的な全体性にほかならない。

このような意味での質料形相論的観点から、改

めて物的実体の自己統一性について検討してみよう。まず、その独立性に関しては、基本的にロウが提示したような定義的同一性としての本質における他の個体からの独立性、すなわち、他の個体に同一性依存していないこととしての存在論的独立性こそが物的実体の独立性の中核である。一方、クーンズが主張した境界の包括性という質料的独立性にも一定の意義は認めるが、本稿では、実体的対象についてのできるだけ一般化された観点を採用するという方針に基づき、そのような境界的独立性は程度を許容するものと考えことにする。またこの点は、その多くの部分を境界のあり方に依存せざるを得ない統一性そのものについても同様である。これらの結果として、曖昧な境界を持つ実体や、複合的人工物およびその諸部品のような対象も実体として承認されることとなる。まとめるならば、実体とは、質料としての力能的外延が実在的定義に基づく形相的統一性によって個体化された「力能的統一体」だと言えるだろう。

一方、物的実体の自己統一性の実在性は、その形相的側面については、実体の実在的定義において用いられるような、カテゴリーへと向かっていく類種関係の実在性がその根拠であろう。その質料的側面に関する実在性の根拠となるものは、本稿における考察にしがえば、力能の実在性だということになるだろう。また、実体の実在的定義においても、その力能的統一性が中核を占めるとするならば、力能の実在性は、類種関係の実在性をも支えていると考えるべきであろう。

マイケル・ラックスは「種は世界を徘徊し、いわば、その実例であるところの別々の個体へと世界を分割していく」と述べ、バリー・スミスは、実体の外的境界は、「もの自体における境界、我々の側での分節化の行為が一切存在しなくとも存在するような類の境界」であると述べた⁽²⁴⁾。しかし、カテゴリーや類種関係の実在性の主張に対しては、

実はそれらは我々の側で設定された概念にすぎないのではないかという概念主義者からの疑念が常につきまとい、実体の境界の実在性の主張に対しても、それらは私たちが規約によって決定するものにすぎないと考える規約主義的疑念が伴いがちである。実際、類種の抽象レベルや境界の粒度レベルは、原理的には無限の段階を設定できそうに思われる。これらがどのようにして有限的・離散的な形で客観的に定まるのか、という問いに対しては、基本的には実体的対象が所有する力能の実在性と法則性にその根拠を求めざるを得ないだろう。そしてこのような法則性のうちの経験的部分すなわち自然法則性についての解明は、種々の科学的探究に委ねられるであろう。

最後に、本稿での考察を踏まえると、**material** と **immaterial** の対比、すなわち物質対非物質の対比はどのような対比として捉えられるべきであることになるのか、ということについて簡単に触れておきたい。これについては、「質料」の意味を、素材などの旧来の意味で捉えた場合における対比と力能的外延という本節で一般化された意味で捉えた場合における対比の双方に言及する必要があるだろう。

前者に関しては、力能的外延という一般化された意味での種々の質料の中のあるくまでもひとつのタイプ、たとえば不可入性や素材の同一性などを伴うような力能的外延として、その相対的な位置づけを低下させざるを得ないだろう。すなわち、このような旧来的意味での **material** 対 **immaterial** の対比は、必ずしも存在論的に基礎的な区別とはいえなくなるだろう。この区別に基づく限り、たとえばロウが挙げていたようなクォークや電子などの素粒子以外にも、電磁場のような「(古典)場」なども **material** だとは言えないことになる⁽²⁵⁾。しかしこれらはいずれも **physical** であるという広い意味において、他の物理学的対象と

同様に扱われるべきであろう。

一方、力能的外延としての質料性に對置されるべき意味での「非質料的」対象は、文字どおりにとれば、その定義上、非力能的であるか非外延的であるような対象であることになる。しかし、少なくともロウの具体的対象の定義を採用する限り、具体性の要件として力能性と時空性が入っている、それを文字どおりに採れば、たとえば集合や数などの抽象的な個体（それらが個体であるとするれば）以外にはなくなってしまう。ただし、この場合の「外延性」は、境界の粒度が重要であるという意味での外延性なので、そのような境界性が問題とされないような具体的対象という広い意味で非質料的対象というものが考えられる。その例としては、たとえば、素粒子が広がりを持つ持たない文字通りの意味での「点」であるとするならば、非質料的であることになるかもしれない。あるいは、ロウが主張するような、広がりをもちつつも単純であるような、すなわち、メレオロジー的な内部構造を持つ持たないような広がりとしての「人物(person)」などもその一例と言えるかもしれない⁽²⁶⁾。

【註】

- (1) この場合の「対象」としては、基本的にできごと・プロセス・事態などと対比される、諸性質の担い手としての実体的な対象が想定されている。また、本稿での「実体的」という用語は、純然たる実体とはいえないかもしれないが何らかの点で実体の典型的特徴を所有する擬似的実体をも含むような広い意味で用いられる。
- (2) [Lowe 1998] pp.199-203, [Lowe 2013a] p.237, [Lowe 2015] pp.67-70.
- (3) [Lowe, 2013b] pp.342-347.ロウは、こちらの定義の方が1998年の定義よりも優れていると自己評価している(p.347 n1)。
- (4) [Koons 2014] p.168.

- (5) [Lowe 1998] p.190.
- (6) [Koons 2014] pp.153-157.
- (7) [Martin 1980] [Johansson 1989] [Heil 2003]
- (8) [Simons 1994]
- (9) [Lowe, 2013b] p.351.
- (10) *Ibid.*, p.356.
- (11) *Ibid.*, pp.351-352.
- (12) *Ibid.*, p.237.
- (13) [Koons, 2014] p.158.
- (14) [Lowe, 1998] p.196, [Lowe, 2013b] p.236.
- (15) [Lowe, 1998] p.194, [Lowe, 2013b] p.237.
- (16) [Lowe, 1998] p.197.
- (17) [Oderberg 2007][Marmodoro 2013]
- (18) [Koons, 2014] p.159.
- (19) *Ibid.*, p.168, [Lowe 2011] ただし、ロウの場合は、タイプとしての能力の個別化についての主張である。
- (20) [Lowe1998]pp.114-118, [Lowe 2002]など。
- (21) [Koons 2014] p. 159.
- (22) *Ibid.*, p.172.
- (23) *Ibid.*, p.166.
- (24) [Loux 1998] p. 123, [Smith 1997] .
- (25) たとえば、次にそのような主張が見られる : [Newman 1992] p.177.
- (26) [Lowe 1998] p.203.

【参考文献】

- [Gabriele G., Loux, M. J. (eds.) 2015] *The Problem of Universals in Contemporary Philosophy*, Cambridge University Press.
- [Heil, J. 2003] *From an Ontological Point of View*, Oxford University Press.
- [Johansson, I. 1989] *Ontological Investigations: An Inquiry into the Categories of Nature, Man and Society*, Routledge.
- [Koons, R. 2014] Staunch vs. Faint-hearted Hylomorphism: Toward an Aristotelian Account of Composition, *Res Philosophica*, 91-2, pp. 151-177.
- [Loux, M. J. 1998] *Metaphysics: A Contemporary Introduction*, Routledge.
- [Lowe, E. J. 1998] *The Possibility of Metaphysics: Substance, Identity, and Time*, Oxford University Press.
- [Lowe, E. J. 2002] Material Coincidence and the Cinemato-Graphic Fallacy: A Response to Olson, *The Philosophical Quarterly*, 52-208, pp. 369-372.
- [Lowe, E. J. 2011] How *Not* to Think of Powers: A Deconstruction of the 'Dispositions and Conditionals' Debate, *Monist* 94, pp. 19-33.
- [Lowe, E. J. 2013a] A Neo-Aristotelian Substance Ontology: Neither Relational nor Constituent, pp. 229-248 in [Tahko 2013].
- [Lowe, E. J. 2013b] Complex Reality: Unity, Simplicity, and Complexity in a Substance Ontology, pp. 338-357 in [Svennerlind, Almang, Ingthorsson (eds.) 2013].
- [Lowe, E. J. 2015] In Defense of Substantial Universals, pp. 65-84 in [Gabriele, Loux 2015].
- [Marmodoro, A. 2013] Aristotle's Hylomorphism, without Reconditioning, *Philosophical Inquiry*, 36, pp.5-22.
- [Martin, C. B. 1980] Substance Substantiated, *Australasian Journal of Philosophy*, 58, pp.3-10.
- [Newman, A. 1992] *The Physical Basis of Predication*, Cambridge University Press.
- [Oderberg, D. S. 2007] *Real Essentialism*, Routledge.
- [Simons, P. 1994] Particulars in Particular Clothing: Three Trope Theories of Substance, *Philosophy and Phenomenological Research*, 54, pp.553-575.
- [Smith, B. 1997] On Substances, Accidents and Universals: In Defence of a Constituent Ontology, *Philosophical Papers*, pp.105-127.
- [Svennerlind, C., Almang, J., Ingthorsson, R. (eds.) 2013] *Johanssonian Investigations*, Ontos Verlag.
- [Tahko, E. T. (ed.) 2013] *Contemporary Aristotelian Metaphysics*, Cambridge University Press.

※本研究は、平成 28～30 年度科学研究費補助金（基盤研究

C：課題番号 16K02108）の研究成果の一部である。